

## 二十二世紀への視座 田中拓也

二十二世紀まであとわずかになった、というところから唐突に思われる方がほとんどだろう。しかし、これから生まれる子どもたちの平均寿命が八十歳を超えるものと仮定すると、その多くは二十二世紀を迎えることになるのだから、まんざら遠い未来の話ではなくなると思う。「心の花」の創刊百年大会が開催されたのは一九九八年。祝賀会の席上で佐佐木由幾先生は「今日の参加者の中で百年後に生きているのは誰でしょう。」とおっしゃられていたのを鮮明に覚えている。当時の百年後は二〇九八年。まさに、二十二世紀の直前である。

『歌壇』（本阿弥書店）の二〇一六年六月号の特集は「結社の進路―結社の近未来を考える」であった。各結社誌の現状と課題、理念とビジョンなど、興味深い指摘や提言が多数あったが、結社の未来を危ぶむ意見が目立ったのが印象に残っている。これまでも同様の特集は各総合誌において組まれていたが、今回の特集は「近未来」とした点が執筆者に切実さを感じさせたように思う。それではいつまでが「近未来」なのであろうか。スパンを少し広げて、冒頭で提起した二十二世紀を視野に入れて考えてみたい。

見えない未来を考えるためには、歴史から学ぶのが一番である。二十世紀のはじまり（一九〇一年）にはどんなことがあったかとい

うと、短歌史の大きな出来事は与謝野晶子の『みだれ髪』の刊行。この年に生まれた歌人は明石海人・五味保義、俳人は中村草田男や山口誓子等の名前が挙げられる。ちなみに、昭和天皇が生まれたのも一九〇一年である。そして、二十一世紀の始まり（二〇〇一年）の出来事としては『竹山広全歌集』の刊行が挙げられる。なお、この年に昭和天皇の曾孫の敬宮愛子内親王が生まれていることも記しておきたい。

当時の『短歌年鑑』（角川書店）を点検してみると、加藤治郎インターネット「i歌人は短歌を豊かにするか」という論文に目が留まった。

インターネット歌人といっても明確なカテゴリーがあるわけではない。（中略）インターネット歌人は、世代とセットであるように思われる。二〇世紀末にあらわれた短歌結社に所属しないインターネットを主たる作歌の「場」としている世代というのが適当だろう。

あれから、十五年経った今日では、もはや「インターネット歌人」という括りも不可能なほど、インターネットは発達し、社会生活に浸透している。「心の花」を見ても、インターネット歌会は活況を呈しており、世界中の様々な世代の人が瞬時に批評を交わすことができる場となっている。また、ツイッターやフェイスブックなどを通じて、短歌の作品発表の場は大きく変容するとともに、拡大が続いている。二十二世紀を迎えるまで、あと八十五年。キーワードとなるのは、「インターネット」と「国際化」と考えるのが自然であろう。「心の花」の創刊百二十年まであと二年。二十二世紀を視野に入れて、結社の未来を考えるのも楽しい。もちろん、人類の存続が前提となつての予想ではあるが：。